

—貧困概念と人間存在—レヴィ＝ストロースを読む—『野生の思考』から『神話論理』へ

3. 『野生の思考』から『神話論理』へ

『今日のトーテムズム』と同じ1962年に出版された『野生の思考』は、その表紙にパンセ（思想、思考）と同音異義語である三色すみれ（パンセ）があしらわれているという、しゃれた言葉遊びになっている。その最終章「歴史と弁証法」はサルトルの実存主義、弁証法的な思考を痛烈に批判している事で有名だが、1964年の一巻の発表から始まる四巻までの『神話論理』への「方法論序説」としての意味をもつ¹とされる。

『神話論理』は、「アメリカ先住民諸社会の神話研究は文字通りレヴィ＝ストロースのライフワークになっている²」とされる大著であり、「ブラジルのフィールドで始まった人類学的研究は、まず親族関係を対象として十数年をかけてオーストラリア、アジアを巡った後にアメリカ大陸の神話世界に帰還した³」とされるレヴィ＝ストロースの研究の核心部分である。

① 『野生の思考』

『野生の思考』は表紙には「三色すみれ」、裏表紙にはスグリ（イタチ科の大形の哺乳動物）の挿絵があしらわれている。北米先住民ヒダツァ人の神話では彼らに狩りを教えたのは姿を変えられる程の超自然的な力を持つ動物だと言うが、当時の人類学者の思考ではその動物種が小型の熊らしいのだが、特定はできなかった。

レヴィ＝ストロースは、ヒダツァの鷲は、狩人が穴に隠れて、穴の上に置いた餌に釣られて鷲が地上に舞い降りる瞬間に素手で鷲を捕まえるという特殊な方法である事、一方スグリは人の仕掛けた罠の餌ばかりでなく、時には穴にまで自ら入り込んで、罠さえ持ち去ると言う習性をもつ事を考慮して、このような鷲をする猟師が「自分と同一視する動物がスグリ以外ではあり得ない⁴」事を検証した上で、この動物を「スグリ」（イタチ科の大形の哺乳動物）と特定していった。

レヴィ＝ストロースはスグリを選ぶヒダツァの人々の、このようないわば「野生の思考」を示して、オーストラリアのトーテムズムの中の生物種は、自然種（タカとカラス、フクロウとヨタカなど）の習性や行動や外見への関心が、「食べるのに適している」からではなく「考えるのに適している」から選ばれている⁵と説明をする。そしてその選択の仕方や分類を「トーテム的分類」とし、そのような自然と共に動き、自然に親和的な思考方法

1 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P167 平凡社新書 498 2009年11月

2 同上 P160

3 同上 P157

4 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P182 平凡社新書 498 2009年11月

5 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P126 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

を「野生の思考」と名付けたのである。

野生の思考では、自然の動植物と接して暮らし、その生態を知り尽くして生活を営む人々に於ける、人々が生活の中のさまざまな場面にあつて体験する、時々遭遇する差異感覚に触発される、五感に響き、感性に響く、感情や印象からの、さまざまな類推を託された「自然種」が登場する。その類推、「隠喩⁶」「換喩」「反転⁷」あるいはアナロジーは、様々な「2項対立のコード」を抱えて、それらを媒介項にして展開される構造を有しており、その分析によって「神話の論理」が顕かにされてゆくことになる。

この類推の連関過程、その構造が、川田順造の「表面的にはかけはなれていると見える兆候同士を、思いかけない遣り方で重ね合わせる事によって意味を発見すると言う、……構造主義の一つの基本となった形⁸」であり、構造と変換の関係である。

渡辺は野生の思考を「季節の推移や天体の動きが織りなす自然の変化のなかで、動植物すなわち多様な種がくりひろげる生命活動に注意を凝らして観察し、自然の中での自らの位置付けとそこで生きる意味を、自然種の多様性そのものを手段として把握しようとする思考のあり方⁹」としている。

② 『今日のトーテムズム』ートーテムズムを否定する

ところで当時の社会人類学と宗教人類学の関心の中心を占めるに至っていた「トーテムズムの理論」は、アメリカ北東部のオブジァ族の研究から発展し、ポリネシアのティコピアの事例、そして19世紀後半以降のオーストリアの事例の研究によって理論化されていた。しかし当時の機能主義的、功利主義的な検討からは「様々な社会がトーテムとして選んだ動植物の、経済的あるいは単に現実的な役割を決定する事¹⁰」が困難であった。

この問題に対して、レヴィ＝ストロースはまず、イギリスの人類学者らが、神話と社会構造の関係についての比較研究によって、「トーテム的分類」である特定の動植物種が選択されるのは、神話と社会構造の間の「アナロジー」によっているとしている所から、もし「アナロジー¹¹」であれば、それは抽象的な問題構成をすることでしか理解しえないのであり、知性によって認識することが可能な事柄であり、つまり普遍的な思考の内側にあつて、客観的である事が確認できるとした。

6 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P130 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

7 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P134 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

8 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P61 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

9 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』 P2 弘文堂 2004年12月

10 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』 P50 講談社選書 2009年6月

11 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』 P52 講談社選書 2009年6月

さらに、ベルグソンやジャン＝ジャック＝ルソーからの「自然状態から文化状態への移行を示す最も原初的な論理的分類は、動植物界から直感的に感覚される対立をもとに、人間にもたらされたものである¹²⁾」との論述を見出して、「トーテム的分類」は、心の内側から対象に向かおうとする哲学者に於いて（レヴィ＝ストロースはかつて哲学から人類学に転向している）、このような思考のあり様が的確に理解されていたとも指摘している。

こうしてレヴィ＝ストロースはボアズの「トーテミズム研究は、名前や標識、超自然的関係への信仰、食事に関する禁忌、外婚制、親族集団など、性質を異にするものを取り込んでいるが、すべてを唯一の類型に入れることは絶対に不可能である。¹³⁾」をひいて、「トーテミズム」と言う概念の設定自体を批判、否定した訳である。

トーテミズムは、当時は原始的な宗教として、現代の知性による理解を越える呪術的な世界とされていたのだが、それを否定して「人間集団間の『文化の系列』と、動植物などの自然種間の関係からなる『自然の系列』との間の照応関係による分類¹⁴⁾」であり、現代を生きる我々にも有る普遍的な思考、現象の中の特殊ケースとして捉えるべきとしている。

③ プリコラージュ（器用仕事）と「野生の思考」

『野生の思考』の第一章は「具体の科学」であり、その中で「野生の思考」は現代フランスにも残っている「プリコラージュ（器用仕事）」にたとえられている。「プリコルール」とは「くろうととはちがって、あり合わせの道具材料を用いて自分の手でものをつくるひと¹⁵⁾」のことだが、このような仕事に係わる思考方法の中に「野生の思考」を見出している。

その思考は、生活上の必要性やある種の美意識上の要請などに従い、手持ちの材料の属性を良く眺め、たとえば形、手触り、色合いなどをすべて知り尽くしたうえで、自らの具体的で体験的な知恵を働かせ、個々の材料との間での会話のような営みをとおして、自らの要請に沿って物を組み立ててゆく、といったような思考手順をとっている。

レヴィ＝ストロースは、このように象徴機能を働かせ、比喻（イマージュ）、心象といったものに近いこの思考を、「既に一般化能力をもつものであり、従って科学的でありえる¹⁶⁾」とも言う。それは生きる上での、時々必要性にそって、いわば多方位、360方位に向かって放たれる、メタフォア、象徴機能を介在させつつ、別の次元へと組み立てようとして取

¹²⁾ 同上 P54

¹³⁾ 門口充徳 <http://www.d4.dion.ne.jp/~mkad/totemism.html> 2013/01/10

¹⁴⁾ 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P121 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

¹⁵⁾ レヴィ＝ストロース 大橋保夫訳『野生の思考』P22 みすず書房 1976年5月

¹⁶⁾ レヴィ＝ストロース 大橋保夫訳『野生の思考』P27 みすず書房 1976年5月

り入れられてゆく、思わぬ展開を遂げる思考である。

たとえば「プリコラージュ（器用仕事）」において、手持ちの様々なかけらが、職人によって今必要なものを拵えるために、全体の中の一つの構成要素としてかけらの特徴が生かされるように、時々の上の生活上の要請を賄おうとする人間の思考、自然の中のあらゆる事物を多方位に渡って観察し、活用するための工夫、対象と共に動く思考とでも言おうか。

近代科学的な思考であれば、対象物は目的性によって切り取られ、限定されてゆくのだが、そうではなく、個々の材料、かけらは職人との間で「話し相手」であるかの如くにその持てる特徴を生かされつつ、そこに組み立てられてゆく。事物や自然などの対象と交錯しあって進む人間の思考といったものであろう。

④ 近代的思考と野生の思考

「野生の思考」は、「感覚的な特性をいったん捨象して抽象化一般化することで射程を広げ累積的に発展する科学的思考とも異なる『具体の科学』であり、・・・¹⁷」、そして「個人意識を社会や階級へと『全体化』することで個と普遍を媒介し得る」とする歴史意識とも異なっているとして、いわゆる近代的思考とは対置されている。

近代科学的な思考は、その個々の対象の個別性を捨象して行われる一般化であるとする、野生の思考の行う一般化は、それぞれの個別性によって支えられ、一般化のゆくえを作る、「構造化」のようなものだろうか。

あるいは「感性と理性を切り離さない普遍的な人間の思考¹⁸」としての「野生の思考」と科学的思考の共存を妨げているものは、「自分達の世界を『未開』とは相いれない合理的な世界¹⁹」として、たとえばトーテミズムという概念をつくりあげる西欧近代の側の独善的な思考なのかもしれない。

レヴィ＝ストロースは近代科学と野生の思考の連続性については「現代の科学が感性と知性の再結合に向かっているということなどを挙げて、近代科学と野生の思考が対立するものではないと言っており、現代の科学によってそれが再認識されつつある²⁰。」とする。

そしてこのような『野生の思考』が「近代の知」への根源的な批判の書と言われるのは

17 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』 P 2 弘文堂 2004年12月

18 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P125 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

19 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P123 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

20 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P124 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

「失われた過去の知恵あるいは未開の思考を持ちだしたからではない。そうではなく、具体の科学としての野生の思考と近代科学をともに広い意味での科学的な思考だと認めた上で共存する二つの思考のうち、野生の思考の方をより普遍的な思考だと主張した²¹」からだと説明されている。

²¹ 小田亮 『レヴィ=ストロース入門』 P124 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月